
Made in The Dream

ごみたるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a d e i n T h e D r e a m

【Nコード】

N 1 0 6 8 B A

【作者名】

ごみだるま

【あらすじ】

都内の安いアパートに住んでいる青年ザ・グルームは、数日前から自分が殺人鬼になっている夢をよく見るようになり、時間を追うごとに夢と現実の区別が曖昧になっていく日々を送っている。

そんなある日、夢の中に謎の女性が現れて、「あなたが今握っているナイフよりもっと鋭利な刃物をあげるから、それと引き換えに今から一年前までの記憶を私に渡してください」と言った。よく分からないまま彼女の言いなり通り要求を呑んでしまったザ・グルームは、それ以降殺人鬼になる夢は見なくなり、代わりに夢の中で

もう一人の自分にたびたび遭遇するようになる。

夢の中をさまよっていると、そこで知り合った人は言った。「ここは誰かの夢の中なんだ」

そしてそのうちに、ザ・グルームは自分の分身たちを切り殺し始める。

雑多なイメージの中で、誰かの夢の世界に閉じ込められた主人公が、「特別な誰か」を求めながら実の母親に復讐する話。

（目が疲れてしまいそうなので、会話文や段落毎に改行をします。ご了承下さい。）

登場人物（前書き）

参考程度に。キャラクター紹介が邪魔なようでしたら削除します。

登場人物

ザ・グルーム

この物語の主人公、一人称は「俺」

ある日夢の中で出会った謎の女性「女神」に取り引きを持ちかけられ、殺傷能力の高い刀剣を得る代わりに、代償としてここ一年分の記憶を奪われる

現実世界で槻島夢子（後述）に好意を寄せているが、交際には至っていない

教会の十字架に仕込まれていた両手持ちの剣で戦う

千葉水簾すいれん

ザ・グルームが夢の中で出会う人物、一人称は「僕」
和装した青年で、日本刀で戦う

クリスチャンで、ザ・グルームとは教会で出会う

あめり

ザ・グルームが夢の中で出会う人物、一人称は「私」
教会でオルガンを弾いていた、目のぱっちりした可愛い女の子

病院（教会は病院のすぐ隣に設置されている）に知り合いが多い
様子

リリーさん

ザ・グルームが夢の中で出会う人物

花魁風の格好をした二十代の女性で、千葉水簾とは知り合いらしい

ヒカ

ザ・グルームの弟

つぎしまゆめこ
槻島夢子

ザ・グルームが好意を寄せている女性

Introduction

エレベーターのドアが開くと、夜の病院の暗い廊下が延びていた。

明日の日曜礼拝でオルガンを弾けと言われて、楽譜を受け取りに行く次第なのだけど、私は肝試しをするために夜の病院へ来たわけじゃない。教会がこの病院の敷地内にあるから、道路を大回りするよりも病院の中を通ったほうが近道だと思ったから来ただけだ。

私の履いたスリッパの音以外何も音が聞こえない。非常階段の緑のランプだけが煌々と光っている。つやつやした白い廊下に映ってぼやけている緑の光をまたいで、私は二階の渡り廊下へ歩いて行く。終始病院の独特のにおいが鼻を突いている。セーターを着ているのにうすら寒い。

夜の病院は私が思っていた以上に怖かった。この先にあるあの暗がりから誰かが見ているのではないか。閉じているドアが開いて誰かが私に襲いかかるのではないか。そんなことを考えてしまうほど、夜の病棟は怖かった。

病院の玄関を通った時はまだ真昼だったのに、窓の外にはもう月が昇っている。さつきまで看護婦さんも先生も患者さんたちもいたのに、誰もいなくなってしまった。

「のりちゃん……？」

楽譜もらいに来たよ、と廊下に向かって話しかけてみる。もちろん

ん返事は返ってこない。薄明るいのに先の見えない闇が私の先に広がっている。

突然背後でガシャンと音がして、びくつと振り向くとエレベーターが閉まった音だった。心臓の音が耳元で聞こえるほどうるさい。洋服の下で不快な冷や汗を感じる。体が硬直した瞬間舌の先を前歯で噛んでしまった。痛い。

非常階段のランプからジリジリと音がしている。窓外に目をやると細い三日月の下に駐車場と植え込みが続いているのが見える。

それにしても、一体どうしてみんないなくなってしまったんだろう。

自分でも情けなくなるくらい怖がりながら、私はちびちびと廊下を歩き続けた。私がちよつと楽譜を読めてピアノを弾けるからって、こんなに不気味な思いをするとは思わなかった。

大丈夫、すぐにのりちゃんに会えるんだから。この渡り廊下を渡って新館の病棟へ行つて、そこから階段を下りて外に出れば教会への一番の近道になる。大丈夫。ちんたら歩いたってあと三分くらいで着くはずだ。

トイレの前を通り過ぎ、心電図やノートパソコンの置いてある前に来たところで、私は不意に左足の裏がぬめるのを感じて立ち止まった。

壁に手をついてスリッパの裏を見してみる。水？ 私は廊下にもスリッパを何度かこすりつけて、暗く白い廊下をまた歩き始めた。

が、今度は壁に触っていた手のひらが濡れている。汚い、と思つて、私は壁を見た。

……血だ。赤いというより赤黒い。飛び出たものが跳ね返ったような血痕と、それを引き延ばしたような跡がある。

その時、

「殺してやる」

私は全身が一気に凍りつくのを感じた。

すぐ近くで男の低い声がした。私の行く先、廊下を折れたところ、自販機やソファのあるあたりからだ。

私の頭の中は真っ白になった。アドレナリンが体中を逆流するような感覚の中、血糊のついた壁に寄り掛かって一步も動けなくなってしまった。

「あなたの今握っているそのナイフじゃ不満でしょう。私がもつと切れる刃物をあげます。そしてその代わりに、あなたから一年間分の記憶をもらいます」

急に若い女の人の声がした。男女二人が会話をしていることが分かったが、女の方は妙にお気楽な話し方だ。声や息の大きさから、二人とも本当に近くにいることが分かる。足が動かないので話を聞くのに集中できてしまう。

「何を言ってるんだ。俺は殺人鬼じゃない。そんなものもらってど

「する」

男が怒鳴った。

しかし私には話がさっぱり分からない。殺人鬼？ 記憶をもらおう？ ファンタスティックだな、そう思った私は無意識に笑い出しそうになっていた。怖すぎて頭がおかしくなったのかもしれない。

「あなたが物欲しげにしているように見えたからです。でも代償は必ず頂きます。何でも与えるわけにはいきませんから。だってもしたら私がお母さんみたいでしょ？」

女の方がさらにわけの分からないことを言う。

私は戻ろうとエレベーターに向かってのろのろと動き始めた。帰ろう、帰って病院の人に知らせよう。私は二人の殺気立った声に背を向けて歩いた。でも相変わらず足が全然動かない。

その時、カランと音がして何かが廊下に投げ出された。

「あなたが殺人鬼かどうかなんて知らない。ただ、あなたが望んでいることを言っているだけなんです、私は。私がいないとあなたはひとりぼっちになるんです。私には分かるんです」

暗くてよく見えないけれど、多分女の方が何かを投げたのだと思う。女の方は心なしか泣きそうな声でまくし立てた。そしてそれきり一切喋らなくなった。

「……」

どうする。私はまだがたがた震えている足を止めて考えた。二人は私に気づいて黙ったのだろうか。だとしたら、私は殺人鬼とやらに殺されるのだろうか。ああ、殺されるなんて、なんて現実味のない話だろう。痛いのだろうか。苦しいのだろうか。そう思ったあたりで、なぜか私はふと、これは夢なんじゃないかと感じ始めていた。そうして悩んだ末、寝息のような音が聞こえ始めたので、私は思い切って廊下の曲がり角から顔をのぞかせた。

そこには、自販機の明かりのもと、ソファアーの上で死んだように寝ている、よれたスーツを着て眼鏡をかけた地味な青年がいるだけだった。

リトル・ヨコハマ聖アンドレ教会

目が覚めると、俺は知らない部屋のソファアの上で横になっていた。

無機質な薄暗い部屋の中、灰色の四角いテーブルを挟んでソファとパイプ椅子があり、ソファアには俺が寝ているが、向かいのパイプ椅子には見知らぬおばさんが座っている。おばさんは厚い本を開いていて俺を気にする様子がないので、俺が起きたことに気づいていないのだろう。

テーブルの向こうにストーブがある。ボタンの赤い色がすり減っている。その奥にテレビがある。まだブラウン管だ。凸面に天井の電気のみやみ明るくない光が当たって白くぼんやりと光っている。隣に置いてある棚にはオルガニストや教会といった言葉が書かれた楽譜が詰めて並べてある。

ここがどこなのかは分からない。寝起きで頭がぼーっとしている。今何時なのかも分からない。俺は確か夢を見ていた。変な夢だった。顔は思い出せないが、女が現れて刃物をあげるだの記憶を取り上げるだの喋っていた。女の表情が瞼の裏にこびり付いて離れない。どんな顔をしていたのか思い出せないが、女の印象は覚えている。俺をじっと見つめていて、でも話が通じなくて、俺を見ているわけじゃないような気がして、でもとても優しくそうで、近寄って肩を抱こうとしてきそうなのに、それが不快で女の前から逃げ出したくなる、そんな印象だった。

遠くで車の通る音がする。部屋には他人の家の匂いが漂っている。

横になっている俺からはテーブルの下にあるおばさんの長いスカートとそれを覆うペイズリーの膝かけが見える。部屋の中はストーブが効いているのか暖かい。おばさんの座っているパイプ椅子の鉄パイプに膝かけの紫と緑の色が映って細長く歪に引き延ばされている。テーブルの端から使い古されたクロスの角が垂れている。テーブルの脚にいくつも傷が付いている。子供が貼ったのかキャラクターのシールがべたべたと貼りつけられている。

チリンと音がして、誰かが部屋に入ってきた。

ぼんやりしていた俺ははっとして上半身を起こした。ブランケットを掛けてくれたようで、背中からずり落ちそうになるのを手でつかんでまた掛けた。

「あら、おはよう。そうだ、今みかんもらったんだけど、あなた食べる？」

「へ？」

唐突に話しかけられて俺は面食らったが、おばさんは本を閉じて笑いかけてきた。見知らぬおじさんがみかんをいっぱいに入れたビニール袋を両手に提げて俺を見ている。テーブルの上にもう一袋みかんがある。これ全部もらったのか。黒いジャンパーを来た髭のおじさんはあまり口を開かずすぐに部屋を出て行ってしまった。

じゃあ餃子は？ さっき買ってきたんだけど、みんなもうお昼食べちゃったみたいなの。おばさんは孫に話しかけるみたい楽しんでそうに一方的に喋りかけてくる。あれ、この人知り合いだった、と思

ったほどだ。俺は特に空腹なわけでもないので断ったが、お煎餅食べる？ お茶とオレンジジュースとカルピスどれがいい？ 寒くない？ と散々だった。

壁に掛けられた小さい時計を見ると、針は二時を指している。窓の外を見ると曇っていて空が真っ白に明るい。ミルクとアスファルトを混ぜたようだ。透明なドアの先には下駄箱が見える。小さな男の子が履くような白と青のラインのあるスニーカーが脱ぎ捨てられている。

「あの……」

まったくもって事情が分からない。俺が尋ねる前に、おばさんが言った。

「昨日、中央病院の待合室で人が倒れているって聞いて、主人と一緒に見に行ったら、あなたがいたのよ」

おばさんはお腹周りがきつそうなタートルネックのセーターを着て、スカートの裾をパタパタさせながらテーブルの上を片付け始めていた。意外と肌の綺麗な人だなと思った。顔が丸く堀が浅い。短いパーマのかかった髪に白髪が目立っている。五十歳くらいだろうか。孫にでれでれするにはまだ若い気がするので、差し詰め近所のおばちゃんといったところだろう。

「体調が悪くて動けないのかと思ったけど、あなたの知り合いの人が来て、寝てるだけだし大丈夫って言ったのね。それで、こんなところで寝てたら寒くて風邪引いちゃうだろうからって、うちへ運んできたの」

テーブルクロスの良いレースがガラスの灰皿に透けて屈折している。灰皿の中は空だ。おばさんがそれを脇に寄せる。

「知り合い？」

「学生服の男の子。お友達かなと思ったけど、すぐどこかへ行っちゃった」

「あの、どんな制服でしたか？」

「黄土色っぽいブレザーで、ズボンがグレーの制服だったよ」

ゴトリと音がして俺の前にマグカップが置かれた。うつすらと湯気が立っている。俺はちよっと頭を下げてそれを飲んだ。温かい麦茶だった。

湯気と息で目の前が曇る。底に沈んだ茶葉がくるくる回る。口腔に麦茶の香りが広がり鼻から抜けていく。

友達ではないだろう。俺の学校は紺色っぽいブレザーだった。

「そういえば、病院に用事があるからちよっと空けてしまっけど、

あなたどうする？　ここで待つてる？　まあ、すぐ隣なのだけど」

考えているとおばさんが言った。

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫。家には主人がいるし」

「病院の隣に住んでいるんですか」

「そう。ここは病院の中にある教会なのね。礼拝堂は二階にあるよ」

おばさんはそう言って、しばらくしてから出て行った。

「……」

もしこれで俺が怪しい輩だったら一体どうするつもりだったのだろう。俺はつくづく心配してしまった。

でも、そうか、ここは教会だったんだ。結局未だに状況がよく分からないが、じっとしているのも退屈だし、教会を見に行こう。俺は麦茶を飲みほして立ちあがった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1068ba/>

Made in The Dream

2012年1月6日16時49分発行